

<今回>279回目 2020年8月14日(金)15時~18時 601号室
読書は10冊目「失われた九州王朝」再読 p179 王と候王 より

<前回>278回目(20-7-27) 出席者 10名

資料(20-07-06-1)前回のまとめ(清水)

-2)勝鬘経と法華経の非海彼本(清水)

-3)七支刀の銘文解説について(清水)

A 報告 新型コロナウイルスの影響から再開して3回目。今回は10名の出席を得て、榛葉氏から、コロナ禍からzoomソフトによる遠隔読書会の工夫案など伺った。今10名ぐらいの参加だからやれないことはない。

前回のまとめで臺を中と読む中国人説(張莉)と金印の委奴をもとに中世怡土城がある、怡土に当てる説も出されたが、この怡は万葉仮名の甲乙論で中ではないと指摘されて消えた。

B資料-2)勝鬘経と法華経に義疏と非海彼本の文献があることから、維摩経にもあるのではないか。聖徳太子が三経義疏を書いたといわれていることから、敦煌から発見の維摩詰経も一概に偽書とは言えない。

-3)この資料は直接は紹介しなかったが、高山氏から明治維新直後に石上神宮に着任して、これまで神宮では六叉の剣とよばれていた、七支刀の文字調査に挑んだ菅政友は水戸光圀が大日本史編纂時に日本書紀の神功紀の七支刀に関係がないか開示を求めたが、時の宮司が拒否した経緯を知っていて宮司に志願した。石上神宮の前に大和神社にあったという伝承を伝えている。こうやの宮の人形から九州王朝の久留米辺りから、大和神社、武器庫の石上神宮と移転したのだろうという。(本に経緯の一端がある)

C 読書 朝日文庫本の p170 七支刀をめぐって

1)天理市石上神宮の神宝として異様な形をした古代鉄刀がある。その表裏に金文字の象眼がある。明治6年から10年まで宮司をしていた菅政友がこの太刀の紹介をして以来様々の学者が文字の解説を試みて来た。

2)相違点と問題点 ①年月日、泰和四年五月一六日。泰和の年号の有無と和の文字の難読。太和はある。泰和=太和として解釈していた。②晋(中国王朝)の文字の字形の読み方③日本書紀神功紀52年の9月七支刀一口、七子鏡一面及び種々の重宝を献る。の記事が石上神宮の六叉の剣と結び付けて考えていた。

3)議論をよんだのは献上説、下賜説。日本では百済との関係から当時の百済が倭国の助力を必要としていたとの前提論が活発であった。そこに最初に下賜説を出したのは朝鮮人民民主主義共和国(北朝鮮)の学者金錫享氏1963年北朝鮮の歴史科学第1号に「三韓三国の日本列島内分国について」、その概要は①従来日本の学会は記紀の記事にもとづいて大和朝廷の朝鮮半島の一角を早くから経営(任那日本府)してきたように言ってきたのは歴史の真実から遠いとんでもない虚構である。②逆に半島の国々(百済、新羅、高句麗)こそ古くから日本列島に進出してそこに「分国」(植民地)を形成してきた。宋書の倭の五王の称号も国名も同じで半島内の本国の名称ではない。③当時ようやく近畿大和の一角に勢威を伸ばし始めた天皇家が徐々に列島内の朝鮮系支配地を併合してゆき、列島内の新支配地を中国の天子に承認を求めたものだ。

4)金氏の七支刀に対する新解釈は①泰和を太和にするのは無理。(百済の年号)②候王は百済王が倭王に与えた臣属の称号だから下賜品(上田正昭、藤間生大らが賛意)③栗原は泰和=太和の証拠を見出した。

5)(榮惑は熒惑の誤植、星座の名)。古田は実物を見たが禾偏だけで口は全くなかった。ただ泰和四年(369年)は神功五二年(372年)と近いと認めた。

次回日程 20-8-24(月) 15時から18時 602号室

-9-11(金) 15時から18時 601号室